

報 告

事例研究、自閉症スペクトラム児の行為の改善と
2者関係性の育成

— 児の志向性から作業療法の成果を問う 第2報 —

辛 島 千恵子

〔論文要旨〕

本研究の目的は、作業療法の成果を行為の改善と2者関係の発展性から検討し、自閉症スペクトラム児の効果的作業療法プロセスを生成することである。

対 象：4歳女児と8歳男児の2名。

方 法：①情動的コミュニケーションをベースにした共感関係、②活動を介したコミュニケーション、③道具とことばを介したコミュニケーションというプロセスにそって作業療法を実施した。

分析方法：研究者が現象学的分析に基づき、児の行為から志向性を感じとるという間主観的な意味づけを行った。

結 果：2事例ともに作業療法の目的であるシール貼りや折り紙など、自らが実行しなかった活動が行えるようになった。さらに効果的作業療法プロセスが生成された。

Key words：自閉症スペクトラム、作業療法、情動的コミュニケーション、現象学的分析、質的研究

I. はじめに

自閉症を対象とする作業療法ニーズは急速に高まり、日本作業療法士協会白書によると、作業療法対象疾患の割合は1995年に4.5%だったのが2005年には66.4%と飛躍的に伸びている¹⁾。その要因は、2004年の発達障害者支援法に謳われている乳幼児期から成人までの地域での一貫した支援が浸透した証拠でもある。

病院での作業療法士（以下、OT）の早期介入は、子どもの総合的な発達援助や養育者への養育を支援している。集団生活が主体となる幼児後半（3歳以降）には療育施設や地域の保育園や幼稚園での、日常生活活動の遂行と子ども集団のなかで主体的に自らが環境

に働きかけができるための支援が行われている。

自閉症スペクトラム（以下、児）とは、広汎性発達障害の各診断群を別々の障害として捉えるのではなく、連続体として捉えることを意味する²⁾。社会性の障害を中心とする発達障害である³⁾と同時に感覚や知覚の過敏性も指摘されている⁴⁻⁷⁾。杉山は、社会性の障害を一言で言うならば「自分の体験と人の体験が重なり合わない」と述べている³⁾。自分の体験と人の体験が重なり合わないとは、象徴的（symbolic）コミュニケーション（ことば、身振り、声など）の発達の方に問題があるのではなく、その基盤となる情動的（affective）コミュニケーションの揺らぎがみられると小林は述べている⁴⁾。また、発達途上で、対人関係に不都合が生じるようになり、大人の誘いに応じてくれ

Case Study：Improvement in Behaviors and Growth of Peer Relationships between Two Children with Autistic Spectrum Disorder

[2323]

— A search for the Effectiveness of Occupational Therapy from the View Point of Children's Intentionality —

受付 11. 4. 6

Chieko KARASHIMA

採用 11. 9.29

名古屋大学医学部保健学科作業療法学専攻（研究職／作業療法士）

別刷請求先：辛島千恵子 名古屋大学医学部保健学科作業療法学専攻 〒461-8673 愛知県名古屋市東区大幸南1-1-20

Tel/Fax：052-719-1372

ない、子ども集団に適応しないと同時に生活場面でもさまざまな行為や活動に不器用さが目立ち、作業療法が実施される^{8,9)}。

情動のコミュニケーションとは、対面する2者関係において、その心理的距離が近い時に、一方または双方の気持ちや情動の繋がりと共有を目指しつつ、関係を取り結ぼうとするさまざまな営みを指し、乳児期前半（生後6か月まで）にその基盤が育つ。

執筆者は「情動のコミュニケーションを基盤にした働きかけと現象学的分析、小児保健研究、Vol.68 No.6, 2009」（以下、先行研究¹⁰⁾）にて児の行為から志向性を読み取り、道具とことばを介したコミュニケーションまでの発展を報告した。行為とは、現象学でいう志向性を伴う行動⁷⁾と定義づけた。そして、その行為の記述から2者関係をとっていた研究者が間主観的に意味づける分析方法^{11~16)}で作業療法の成果を報告した。間主観的意味づけとは、児へ重なることで児の行為から感情や志向性が観取されることであり、OTの身体が児の身体へ移入されることで感じられる現象を記述する方法である。

この先行研究は、1事例からの仮説生成研究である。2者間で情動のコミュニケーションを基盤にして児に関わることでOTへの安心感を築き、徐々に大人の意図に応じる行為を促した。その関わりのプロセスで、活動と身体を介したコミュニケーションから道具とことばを介したコミュニケーションに発展した。これらの結果は、2者関係をとるさまざまな生活世界¹⁷⁾でことばや表情が乏しく、意味の共有が困難で、不器用な児の療育支援、学校生活支援などに役立つと考えられる。

II. 目的

1. 先行研究で生成された児の作業療法プロセスの①情動のコミュニケーションをベースにした2者関係、②活動を介したコミュニケーション、③道具とことばを介したコミュニケーションといった働きかけにより行為の改善と関係性の発展を目指した作業療法を実施する。
2. 作業療法の成果を児とOTの行為の記述から間主観的に意味づけを行い作業療法の成果を導き、行為の改善と2者関係の発展性から検討する。
3. 先行研究で生成された自閉症スペクトラム児の作業療法プロセスと本研究で生成された作業療法の

プロセスを検討し、象徴的コミュニケーションの扉を叩き始めた児の効果的作業療法プロセスを提示する。

III. 方法

1. 対象

事例A（以下、A）は平成20年10月、事例B（以下、B）は平成16年10月からC医療福祉センターにて作業療法を実施している。年齢、性別、診断名などは表1に示す。

2. 情報の要約と作業療法計画

1) 情報の要約と本事例研究の作業療法の目的

A、B共に学校、保育園、家庭では行うことができない行為を本事例研究における作業療法の目的とした。Aの目的は、感覚欲求を満たすなかで、シールなどを見て目的の箇所に貼って楽しむことができる。Bの目的は、折り紙という新しい活動への身体促進に応じて、モデリング（OTが折り紙を折って見せて、児も同じように折る）による学習ができることとした。詳細は表1に示す。

2) 作業療法の手段・方法

先行研究で生成された作業療法のプロセス①情動のコミュニケーションをベースにした2者関係、②活動と身体を介したコミュニケーション、③道具とことばを介したコミュニケーションを2者関係のなかで展開しながら1セッションで目的を達成させる。以下、具体的な手段を示す。

- i. 行為の基盤となる感覚欲求の調整と姿勢^{18~23)}や運動企画を遊具、玩具にて促す。
- ii. 情動のコミュニケーションを基盤にした働きかけ¹⁰⁾
 - a. 成り込み²⁴⁾

OTが児に重なり児を生きようとする。具体的には、児が関心を寄せたことに対してOTもいくつかの方法で関心を寄せて共有すること。

- b. 巻き込みに伴う先取り成り込み²⁴⁾

OTが意図する活動に誘いたい時に、先に児の活動に関心を寄せ共有するなかで、児を誘うこと。

- c. 巻き込み²⁴⁾

OTの意図に誘う、引っ張ること。具体的には、手をつないで連れて行く、モデリング、身体促進を行いながら誘うこと。

表 1 事例の情報と解釈作業療法計画

事例	年齢	性別	診断名	担当作業療法士からの情報：要約	医師、その他の情報の要約	本事例研究の情報と行為の改善を目指した作業療法計画
A	4 歳10か月	女児	低機能 自閉症	①感覚欲求：プラスチック系の玩具を噛む ②JSI-Rの結果 ・前庭系→Red (ブランコなどの遊具が嫌い) ・触覚系→Red (体に触れられるのが嫌い) ・固有感覚系→Yellow ・聴覚→Green ・視覚→Yellow ・臭覚→Red ③新版 K 式発達検査 (CA：4 歳 6 か月) ・総合→DA1 歳 7 か月 (DQ34) ・姿勢、運動→DA2 歳 0 か月 (DQ44) ・認知、適応→DA1 歳 7 か月 (DQ34) ・言語、社会→DA1 歳 0 か月 (DQ21) ④好きな遊び：プラスチック類の玩具を噛む、プール、海水浴、人形遊び、見立て遊び ⑤嫌いな遊び：動く人形や揺れ遊具 ⑥ことば：嫌な時→イヤー、ボールの要求→ポー、抱っこ→ダー バイバイ→パー 他 ⑦保育園の様子：子どもの行為を真似ることができない 集団の中では教えても学習できない	①診断時の事例の年齢 ・2 歳 3 か月 ②診断の根拠 ・言語発達の明らかな遅れ ・人への関心が低い ・コミュニケーションにおける理解の低さ ・一度、出現した言葉の消失 ・新版 K 式発達検査の結果	●本事例研究 (1 セッション) の目的 感覚欲求を満たすなかで、シール貼りを見て目的の個所に貼り楽しむことができる ●本事例研究 (1 セッション) の目的までのプロセスと手段 方法 ①噛む感覚欲求から巻き込みに伴う先取り成り込みにより他の触感覚遊びを共有する ②前庭-固有感覚をベースとする姿勢調整や運動-感覚遊びの巻き込みとモデリング ③①と②を A の主体的な活動を促しながら、物の操作の遊びの共有 ④保育園の集団での活動誘導の方法を提案する
				感覚欲求を満たすなかで、物の操作や弁別能力の向上。やり取り遊びの共有	①診断時の事例の年齢 ・3 歳 8 か月 ②診断の根拠 ・言語発達の明らかな遅れ ・人への関心が低い ・視線が合わない ・感覚反応の偏り ・新版 K 式発達検査の結果 ・ICD-10の結果	●本事例研究 (1 セッション) の目的 折り紙という新しい活動の身体促進に応じ、モデリングによる学習をする ●本事例研究 (1 セッション) の目的までのプロセスと手段 方法 ①前庭・固有感覚を好むので B の感覚欲求に巻き込みに伴う成り込みにより姿勢調整、運動企画の遊びを共有する ②①を行う中で OT へ視線、身体的関わり、声かけなど (粗線触発) を促す。 ③①と②を B の主体的な活動を促しながら、初めて経験する折り紙をモデリングにより折ることができる ④学校での巧緻活動 (学習活動) の誘導の仕方を提示する
B	8 歳 4 か月	男児	低機能 自閉症	①感覚欲求：跳ぶ、揺れる強い刺激 ②JSI-Rの結果 ・前庭系→Yellow ・触覚系→Yellow ・固有感覚系→Yellow ・聴覚→Yellow ・視覚→Yellow ・臭覚→Yellow ③新版 K 式発達検査 (CA：8 歳 3 か月) ・総合→DA2 歳 7 か月 (DQ31) ・姿勢、運動→DA3 歳 6 か月 (全項目可) ・認知、適応→DA3 歳 3 か月 (DQ39) ・言語、社会→DA1 歳 9 か月 (DQ21) ④好きな遊び：ボール蹴り、トランポリン ⑤嫌いな活動：字を書く、ボタンかけ ⑥ことば：お母さん→ママー (学校は絵カード使用) ⑦学校の様子：人が沢山集まる場所には入れない、いつもと違う状況下では怒る、泣く ⑧人をよく見ない、動いているものを追視できない 手指の分離運動を促し、学習活動を行いやすくする	①診断時の事例の年齢 ・3 歳 8 か月 ②診断の根拠 ・言語発達の明らかな遅れ ・人への関心が低い ・視線が合わない ・感覚反応の偏り ・新版 K 式発達検査の結果 ・ICD-10の結果	●本事例研究 (1 セッション) の目的 折り紙という新しい活動の身体促進に応じ、モデリングによる学習をする ●本事例研究 (1 セッション) の目的までのプロセスと手段 方法 ①前庭・固有感覚を好むので B の感覚欲求に巻き込みに伴う成り込みにより姿勢調整、運動企画の遊びを共有する ②①を行う中で OT へ視線、身体的関わり、声かけなど (粗線触発) を促す。 ③①と②を B の主体的な活動を促しながら、初めて経験する折り紙をモデリングにより折ることができる ④学校での巧緻活動 (学習活動) の誘導の仕方を提示する
				感覚欲求を満たすなかで、物の操作や弁別能力の向上。やり取り遊びの共有	①診断時の事例の年齢 ・3 歳 8 か月 ②診断の根拠 ・言語発達の明らかな遅れ ・人への関心が低い ・視線が合わない ・感覚反応の偏り ・新版 K 式発達検査の結果 ・ICD-10の結果	●本事例研究 (1 セッション) の目的 折り紙という新しい活動の身体促進に応じ、モデリングによる学習をする ●本事例研究 (1 セッション) の目的までのプロセスと手段 方法 ①前庭・固有感覚を好むので B の感覚欲求に巻き込みに伴う成り込みにより姿勢調整、運動企画の遊びを共有する ②①を行う中で OT へ視線、身体的関わり、声かけなど (粗線触発) を促す。 ③①と②を B の主体的な活動を促しながら、初めて経験する折り紙をモデリングにより折ることができる ④学校での巧緻活動 (学習活動) の誘導の仕方を提示する

注 1 JSI-R (Japan sensory Inventory Revised) の判定基準：Red－感覚刺激の受け取りに若干偏りがある
Green－定型発達児の75%にみられる状態。巻き込みに伴う先取り成り込み：OT が意図する遊びに先にいないながら、児を誘う。
注 2 CA：生活年齢 DA：発達年齢 DQ：発達指数

d. 見守り

児の様子を静観すること。

e. モデリング²⁵⁾

OTが遊んで見せる, 道具などを使って見せることによって児の行為に変化が生じること。

f. 身体促進^{26, 27)}

身体に触れてやり方を教えること。

AとBの作業療法は, 本研究の目的(表1)が達成されたところで修了した。

iii. 活動

センターの作業療法室(以下, OT室)。

感覚統合療法遊具: トランポリン, オーシャンスイング(板状の揺れる遊具), マットなど。

目と手の協調性を促す活動: はさみ, 紙, 折り紙, 玉入れ, コイン入れ, シールなど。

iv. 作業療法の実施者

研究者とA, Bとは実施当日が初対面とした。

3. 分析方法

現象学的分析方法を基礎²⁸⁻³⁰⁾として児の行為の間主観的な意味づけを行った。意味づけNo.1には「OTは○○と感じた」という記述方法をとった。但しテキスト(経時的に活動を区分化した作業療法の記録)からのファクト(区分ごとの事実), コンテキスト(ファクトごとに文脈を整えて客観的意味を取り出し書き換えたもの)の記述と各タイトルは研究者と協力者(他のOT)で行い, 信頼性を担保した。実際の分析方法は, 図1の順序で行った。コンテキストを基にAとBの作業療法を実施した研究者が意味づけNo.1を行った。次に各タイトルを基に志向が観取された根拠, 根拠として確信した過程や条件などの意味づけNo.2(解釈)を行い, AとBの行為の変化を踏まえて作業療法の成果について検討した。

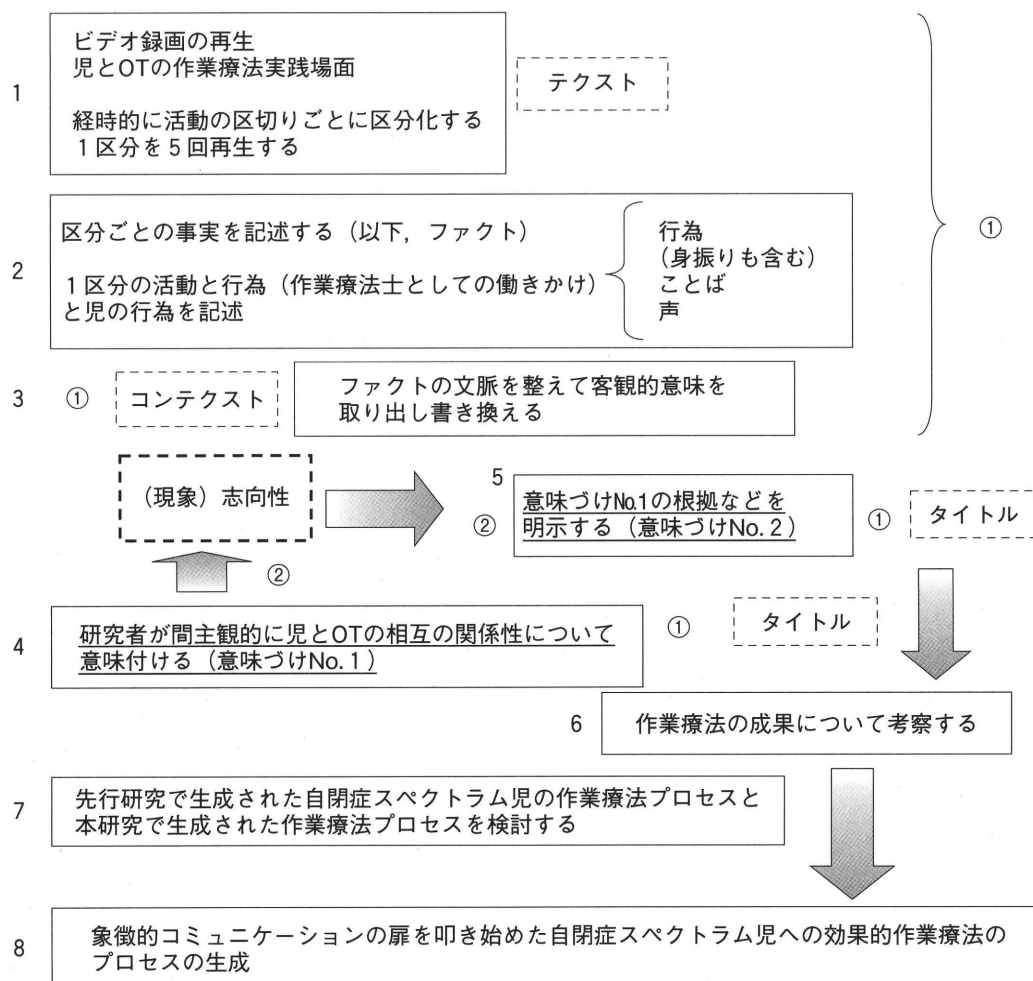


図1 分析方法の手順

①研究者と協力者により実施

②研究者による間主観的意味づけ

注: 1~7は方法の手順を示す

4. インフォームドコンセント

Cセンター長へ依頼をしたうえで、研究内容の説明を文書と口頭にて行い、承諾を得た。AとBの保護者には、研究の説明と参加への危険、利益、不利益やそれに伴う倫理的配慮を説明書にそって行い同意書にて署名をいただき同意を得た。個人情報の保護については、データ解析までの資料は、CセンターとD大学研究室にて鍵のかかるロッカーに保存し研究終了時にはすべての資料を破棄し、個人情報の保護に努めた。

IV. 結果：行為の改善と2者関係性の発展について

Aのテキストは15, Bは16であった。Aの作業療法に要した時間は37分54秒でBは39分56秒であった。A, B共に作業療法目的は達成された。活動は、触覚の感覚欲求を満たすためのナイロンタワシ、ビニールの網に入ったボール、トランポリン、オーシャンスイング、コロコロ玉入れ、などであった。ファクトごとにコンテキストを記述した。テキストごとの活動、各ファクト、意味づけNo.1の要約とタイトル、意味づけNo.2(解釈)のタイトルは表2, 3に示した。以下に行為の改善と2者関係性の発展を意味づけNo.2(解釈)をした一部を経時的に示す。

1. 事例A

1) ナイロン系の感覚欲求とOTへの関心

OT室に入るとすぐにナイロンタワシを噛むことから、OTへの関心が向き難いと考えた。そのため、タオルでの触感覚遊びに、巻き込みに伴う先取り成り込みをするが「あー」と明確に拒否をする。それらの行為から、歯を使った噛みごたえのある素材への感覚欲求が強いとわかった(表2, ①)。その後、OTを目で追うことやナイロン系の網を噛みながらニコニコとOTに向かって微笑んだ。これらの行為から、OTを頼りにしなくてはならない大人として受けとめていることがわかった(表2, ②)。また、ナイロン系の感覚欲求は、2者関係をとるために必要な感覚であることがわかった(表2, ③)。

2) 身体と活動を介したコミュニケーション

i. 要求行為と姿勢調整

ハシゴに登って棚の箱を取り出すという意図を、その方向を見ることで伝えた(普段の作業療法で行っていること)。それは、「私の要求を聞き入れて」との強い要求であった(表2, ⑤)。さらにOTからのオー

シャンスイングへの巻き込みかけに対して、自らが網を噛まずに立位となってバランスを楽しむことができた(表2, ⑥)。

ii. 相手の意図の予測

棚の箱に手指しをして要求したが、それに応じないOTへ不満の声を出した(表2, ⑦)。OTがナイロンタワシを隠しても直ぐに気付く「いやーん」と怒る。関係性の中からOTの行為の予測ができていた(表2, ⑨)。

3) ことば、身体活動を介したコミュニケーション

i. ことばでの要求と活動

Aからハシゴの要求をし、それに応じることで、協約性の修復に向かった(表2, ⑩)。自らハシゴを棚にかけようとする行為やOTの手を引いて「チャージ」の要求からは、強く普段の作業療法(箱の中には噛む感覚を楽しむ玩具が入っている)をして欲しいという意図がわかった(表2, ⑪⑫)。ハシゴの間を跨いで歩く遊びには、OTのモデリングに応じることができた。

ii. シール貼り

座ってシールをOTの手に貼ることを身体促進で教えると、よく見てOTの手に貼ることができた。OTが「ここに貼って」というとじっと見て貼る(指腹つまみ)ことができた(表2, ⑭)。

2. 事例B

1) 強い触感覚欲求とトランポリン

Bは、トランポリンを強く跳び、ボールをわざとOTに蹴った。これらの行為は、初対面のOTへのBなりの適応の行為と考えられた。またトランポリン上で力強く跳んでいることから足底の強い感覚欲求があると考えられた。そのため、Bの足底を強くタッピング(強い触圧)すると、「まんま」と喜んで遊びを共有することができた(表3, ②③④)。

2) 身体と活動、ことばを介したコミュニケーション

i. 姿勢調整とアンビバレンツな行為

オーシャンスイングでは、OTへ近づいたり、離れたりしながら、Bの巻き込みに応じてくれるかどうかを確認した。これは、OTを自分の子分として従わせたいという気持ちと共有を求めるアンビバレンツな行為と考えられた(表3, ⑤)。トランポリンの下からBの足底を強くタッピングすると自ら押し返して遊びを続けた。この時Bは、自分の遊びに応じてくれた

表2 結果 事例A 意味づけ No. 1 とタイトル, 意味づけ No. 2 (解釈)

時間	活動	OTファクト	Aファクト	意味づけNo.1の要約	タイトル	意味づけNo.2(解釈)のタイトル
1m32s	ナ・T	6	あー	ナを噛んで離さない。Aの声を真似ておそれるおそれるナを取り上げたが怒らなかったことから、噛む行為を抑制する方法もよい。O Tの行為に関心があるように目で追っている	OTの関わりのかみ 噛む行為の抑制 OTへの関心	他の触覚感覚への先取り巻き込み ① 噛む感覚欲求の強さ
3m3s	T・タ	4		Tから声をかけるがOTの方を見てくれないことから活動事態が嫌いと感じ、ナのためにタオルを渡したが了承せずにOTを追うことから、どうしてもナを欲していることがわかる	前提感覚を好まない ナイロン系の素材に対する噛む 感覚欲求がある	Tへの先取り巻き込みと明確な拒否 ② ナを噛む特別な意味
1m40s	O・網	5	6	ボールの入った網を見つけて噛みながらOTを見ながらニコニコしている。体幹へのくすぐりはニコニコしているが強い抱きしめは、はっきりと拒否をする	噛むことで満たされる。圧触覚刺 は苦手。くすぐりは好む	ナイロン系の物を噛むという感覚欲求を ③ 充足しつつ対人関係の形成
5m11s	0	7	あーい いやーん	歌を歌いながらOへの誘いに応じて一緒に座りOTに体をもちかか る。大きく揺らすと自らバランスをとり噛む行為は止まる。しかし、 バランスが上手にとれるようになると噛む行為が出る。網を取りあ げてさらに大きく揺らすと網をなめることは止まる。腰を介助して 立位に誘導すると途中から自ら立ち上がって揺れを楽しむ	楽しい活動に挑戦 噛む行為が止まる。OTの積極的な 巻き込みと運動企画への挑戦 「いやーん」の嬉しい場面での発声	「噛む」行為を見守る バランス、姿勢調整を行う遊びへの挑戦 ④ 噛む感覚欲求の抑制 ことばでの交信と共有
18s	ハシゴ	1	2	自らOから降りると自慢げにOTを見る。ハシゴを渡るようにTまで行 き、OTをチラリと見るのは、Tの上にナの入った箱を欲している	意図を伝える視線と共有	⑤ OTへの信頼と援助を要求
2m34s	0	5	うーん	座って揺れを楽しんだ後に自ら挑戦するかのように立ち上がり、バ ランスを上手にとる。OTからの圧触覚刺激も応じるが途中、我慢で きず、もう、ダメというような表情と声を出して自ら降りる	姿勢の保持力が弱い姿勢が崩れる 感覚を楽しむことができる 拒否と自らの選択	⑥ 自ら姿勢調整 OTを信頼したうえでの拒否
16s	0 ナの入 った箱	3	うんうん	Tの上の棚にナの入った箱があることを知っている様子で手をしっか りと伸ばして要求をする。OTが応じないことに怒った 声からは、OTが応じてあげないことへの不満。または、いつもは担当 OTが応じてあげているが今日は応じてくれないことに不満を訴える	協約を守らないOTへの不満の声 ナの欲求の強さ	⑦ 自分の思いを受けないOTへ の不満と強い欲求
1m50s	他 T	5	うーん	OTを強く噛むことから、これまで噛むことを止められていたことへ の欲求不満が溢れたような噛み方でT上を歩く。OTが圧触覚刺激を 与えてAのペースを乱したことは、強く不快な声を出し、両親のい る廊下の近くまでOTを連れて行く行為から、両親に助けを求めた	感覚欲求の充足 OTの積極的巻き込みへのはっきりとし た拒否。両親への訴え	⑧ A自らの関係を修復するために噛むこと で感覚欲求を充足させる関係が崩れるの ではないかというOTの不安
1m50s	ナ	10	あーん	Aにナを渡して関係を取り戻そうとする。OTに取られないようにナを 抱え込む。OTに抱かれてロッキングされている途中でナを隠して 「いやーん」と怒り自らTから降りる	OTへの明確な拒否 好きな感覚刺激への欲求の強さ	⑨ OTにはなくOTの行為への拒否 OTの意図を予測した行為
1m9s	0 ハシゴ	5	ふーん	OTの抱っこには応じてくれることから、OTへの拒否ではなくOTの行為 への拒否だとわかる。Oをやり始めるとすぐに拒否することから、Oを させようとする行為への拒否とわかる。声を出しハシゴまでOTの手を 引いて要求する	関わりを通じて怒りを伝える OTの積極的な巻き込みに対する拒否	⑩ OTの行為を拒否 OTを受け入れる(両価性) 関係性の保持
2m23s	ブ・T・箱	8	あーうん やーうん あーん	棚の箱にナが入っているのをすでに学習している様子で、ブロックを 積んで取ろうとするが届かないことにすぐに気づき、OTに手を伸ばし て抱っこを要求する。自らハシゴを立てて取ろうとするが、OTが手伝 うと納得したような表情で見守るが、OTがわざと断念すると「あーん」 と言って自ら挑戦する	すでに学習している手段と運動企画 の表現 OTが自分の要求を叶えてくれるとい う期待と失望	⑪ 普段のOT室での遊びを主張しOTへ伝達 OTとAの役割を主張、伝達
4m38s	抱っこ ジャンプ ハ ボ・網	7	あーん エーン チャーダイ	OTの手を握ってトランポリンを歩くことからOTへの信頼はある。OTの 抱っこをしながらジャンプにはしるが身を委ねていたが、不快な声を出 してTの手を引いて降りハシゴまで誘導することから、普段はハシゴ を使って棚の箱を取っていることがわかる。手を強く伸ばして「チャー ーダイ」という体と言葉の強い表現となる。背伸びのバランスもとれ ている	OTの行為への拒否とOTへの信頼 担当OTとの内容をOTに教える 要求がすぐに通らないもどかしさ 「ちょうだい」という言葉と適切 なバランス反応	⑫ 普段のOT室での遊びを主張する。OTへの もどかしさ OTとの信頼関係
4m9s	ボ・網 0	3	あーエー	Oに抱っこで誘導するがすぐにおりる。再度Oに網をかけて誘導すると 立位でバランスをとり、網に手を伸ばす。Aの挑戦、バランスをとるの が上手になっている	網への感覚欲求 自発的な取り組みへと発展 バランスの上達	⑬ OTの巻き込みと受け入れ 姿勢調整、立位での運動企画への挑戦
4m9s	ハ シール T	8	9	ハを見ても棚に上げるような要求をするのではなく、OTの誘導で 床に置いたハを渡りながらTまで行く。Tに準備しておいたシールとOT の手の動きを見ながら優しい声が出る。運動企画から目と手の協調性 のある遊びに繋がった。自分の指先とOTの指を見ており、誘導すると 貼ることができた。さらに自ら自分の手に張った後OTを見ている	OTの巻き込みから自発性へ 運動企画の遊びから目と手の協調遊 びへの主体的取り組み	⑭ シール活動のモデリングと身体誘導に 応じる。シールという新しい活動の共 有
4m12s	T 0	4	6	抱っこをしてTから降りるがすぐに自らTに登ることから、シール貼りが 楽しくて、続けたかったようだ。抱っこをしてOに乗ると自ら立って バランスが崩れることがなく、笑顔で後方のOTを見る。「大型バス」の 歌を歌いながら「ほっ」という個所では自ら「ほっ」とOTの真似をする しい声での呼応	運動企画の楽しさと目と手の協調遊 びの交互作用 運動企画を含めた遊びの楽しさと楽	⑮ シールという目と手の協調性の遊びと 身体を通じたコミュニケーション

■ 嬉しい, 満足している □ 不満, 不機嫌な表情

O: オールジャンプ T: トランポリン ナ: ナイロンタワシ 網: ボールをいれるナイロン製の網 ハシゴ: 運動遊び用の幼児専用のハシゴ

抱っこ: 遊びの遂行を助けるための抱っこ ハ: はさみ 箱: ナイロンタワシなどが入った箱

ジャンプ: その場で両足で飛んで着地する, 両足をばらばらに着地する シール: 幼児が好むシール

OT に対する安心感と遊びに対する満足感を体験することができた。

ii. ことばでの交信とアンビバレンツな行為

OT がボールを持って「いくよ」と言うと「はいー」と応答をして、OT を見て違う方向へ投げて、自分に従わせようとした。しかし、OT がB にすぐに応じずに見守っていると苛立ち (表3, ⑥⑦⑧) と反発を表した。

iii. 対等な関係

嬉しそうな声を出しながら足底をOT に向けて触圧

刺激を要求したことから、お互いに巻き込み、応じる、楽しむというギブ&テイクの関係を求めていることがわかった。

3) 道具, ことば, 物の操作を介したコミュニケーション
その後、OT がはさみの活動に巻き込むとBは一旦、耳を押さえて拒否をした (表3, ⑪⑫)。しかし、はさみ活動に応じた後は、トランポリン上でOT に足底へのタッピングを要求することから、ギブ&テイクの関係を求めていることがわかった (表3, ⑬)。

その後、OT が「お勉強」と言うと、側に来て、

表3 結果 事例B 意味づけNo.1とタイトル, 意味づけNo.2 (解釈)

時間	活動	OTファクト	Aファクト	意味づけNo.1の要約	タイトル	意味づけNo.2(解釈)タイトル
1m1s	T	0	3	一目散にトランポリンへ行き、激しく跳んで楽しむ ボールをとる時にOTをチラリと見る	OTへの不安 OTへの関心	活動を介在させながらOTが信用できる人か ① どうかを探っている
2m51s	ボ 0	7	9	OTの側にわざとボールを転がしOTの側のブロックに座る OTが手で体幹を圧迫するように触れることには拒否した 担当OTの側に行ったことからOTのことを言いつけたい 気持ち。Oで誘うとすぐにOTの側に来たことからOTへの拒否ではなく、OTの行為を拒否	OTへの関心と要求 圧刺激への拒否とOTの受け入れ	好きな遊び(感覚刺激)と嫌いな遊びの表現の明確さ ②
3m01s	T 棚開け	14	16	強く跳ぶ様子から足底からの刺激を求めていることがわかる。徐々にOTに近寄りシートアップさらに強く跳ぶ 棚を開けるように指示するような指差し。「ここ」とOTの抱っこ身振りをすることで、意味(抱っこで棚まで届く)がわかり、応じるが取れないのが嫌になったのでT跳ぶことで不満をコントロールしている Bの要望と違ったようで「違う」という強い指差し	足底の強い刺激を求める OTが子分的存在 要求のことば「まんま」 満たされない思いと感覚調整	Bからの積極的な巻き込みでOTはBの行為を受容できるかどうかを確認 OTの静観 ③
1m15s	T・ボ	7	8	OTが転がしたボを見ながらもOTに返さず他の方向へ強く蹴ることから、OTへの関心は強い。OTのBへの関心を確認する	OTへの探りと両価性 足裏の感覚欲求と満足 遊びの共有と満足	Bの巻き込みに応じてBの足裏へ強くタッピング ④ Bの感覚欲求への満足感と関係への満足感
4m37s	O・コ	9	3	OTの遊びへの導入にすぐに応じると思ったが、OTの側に来ては離れて焦らしている	新しい遊びへの巻き込みの成功 親分的な関わり	関わりへの不安と親分的関わりをしながら繋がりを求める ⑤
49s	T・ボ	8	11	Tの下からOTが足裏を強く押すと興奮し楽しんでいることから中核よりも末梢への強い触圧感覚を好む。ボを蹴る時も強い触感を好むと同時にOTのはしゃぐ声聞きながら興奮。OTの関心に向けるような「うゝ」という声かけ B自らが乗り、T上のOTを突っ試みていることから「一緒に遊ぼうよ」と誘っている。OTが投げるボに向かって構える身振りをすることから「ここからでもキャッチできる」という自慢と「いくよ」に「ハーイ」の返事 OTと逆の方向へボールを蹴ることからOTの反応をみる	OTから受ける足裏の強い感覚刺激への満足感とOTと共有 Bからの誘いと楽しさと安心感	遊びの共有と満足、Bの巻き込みに応じるO Tへの満足感と安心感 ⑥
1m20s	T・ボ・O	6	12	OTとのたの遊びの途中からTに行きOTの方を見ていることからOTを拒否しているのではなくTの感覚欲求を求める方が強い	誘いと要求の行為 「ハーイ」の応答 OTの子分的立場を強要	ことばによる交信 ⑦ Bの巻き込みでOTが容易く応じないことへ苛立ちと強い要求
1m02s	O・紙	2	4	折り紙活動に誘うために紙をクシャクシャと鳴らして誘うと耳を抑え、不快な様子と怒りに近い行為の連続	OTへの反発と軽い怒り	OTが応じないことへの憤りとOTの巻き込みへの拒否 ⑧
2m42s	た・ボ・T T	12	13	OTが紙を止めてボをBに転がすとTの下に向かってニヤニヤして蹴りOTの様子を探っている。応じないOTに対して様子を窺うように側に座る、OTがBからタを取り上げたことで「あーん」という抗議の声とたをお互いに叩きつける遊びのなかで「まんま」という楽しそうな声となる	嫌な活動の中止と安心 自分にならないOTへの不安 共有遊びへの満足と声	親分的関わりと消失 巻き込みに応じる、応じないから生まれた対等な人間関係、真の信頼関係 ⑨
1m08s	た・T	1	2	OTとのたの遊びの途中からTに行きOTの方を見ていることからOTを拒否しているのではなくTの感覚欲求を求める方が強い	対人緊張からの感覚欲求	ナイロンタワシの感覚欲求の充足と対人関係のストレスへの修復 ⑩
8m42s	紙・T・O	22	30	OTが紙に触っているとじっと見ているのはさみと紙を持ってTに近づくと足で蹴ることから「それはしない」という意味。OTが何も持たずにTに登ると安心したようにOTに優しく跳びながら近づく。体幹を強く揉む刺激を好むOに揺れながらも足裏をOTの方に向けてニヤニヤしていることから刺激を欲している。紙とはさみ活動を受け入れてくれるためにBの要求を受け入れる	蹴りによる「違う」の主張 OTとの信頼関係のもとでの拒否と怒り OTの子分的存在 OTの戦略	信頼関係の形成過程 OTの強い巻き込みの失敗とBの怒り お互いの受容と関係の修復 ⑪
5m37s	紙・T・O	14	16	OTが紙とはさみを準備している側に素早く来て見ている自ら紙を保持して切ることができることからこの活動はすでに学習している。しかし、すぐにTに行つて跳ぶことからOTへ応じる範囲を自分で決めているようである。ずっとOTを見ながらBからTへと遊ぶがOTを誘っているようである。感覚欲求のみではない	はさみと紙の活動はすでに学習している 焦らしながらOTの関心をB自身に向けている	自発的なはさみ活動と対人関係における自己コントロール ⑫
2m06s	T	7	11	背中を摩るような刺激に応じてじっとしているが、次にTに蹴りを入れながら足裏刺激を欲することからOTのBに従うような対応を確認する。体幹への圧刺激は強い拒否	他動的刺激の受け入れ OTの受け入れと要求	対人関係でのギブ&テイク ⑬
40s	O	5	8	揺れながら足裏をOTに向ける。Bが満足するまで刺激を与え関係の修復を図ることで次の活動に巻き込む体制をつくる	対人関係の優位誇示の受け入れと安心	信頼関係の修復と自己主張 ⑭
4m44s	T・O	6	17	OTをチラリと見て誘うようにTへ行く。次にチラリと見ながらOへ行く。Oに座っているBに「座ってもいいですか」に対して「ハーイ」の応答から待っていたようだ	OTの強い関心 素直な関係	信頼関係のうえでの甘えと受け入れに対する安心と言葉での了解と受け入れ ⑮
1m	T・O	11	12	手を握られてるBからも握り返すことで、OTの誘いへの信頼を感じる。折り紙に誘うがすぐにOに行き、OTを窺っている。「お勉強」という言葉でOを足裏で床を強く押してOTの側に来て折り紙を見ている。「お勉強」という言葉が学習面での指示する言葉として共有されている。身体促進に応じた後に自ら試すように折ってからOTをチラリと見て「これでいいか?」と確かめる	「お勉強」ということばの理解 身体促進と自発性	小学校の先生や担当OTと同等の関係が成立言葉での応答と身体促進、モデリングの受け入れと自発的活動 ⑯

嬉しい、満足している
T：トランポリン O：オーシャンシング ボ：ボール 棚開け：OT 室の棚を開ける 紙：はさみや描画のために準備した紙や折り紙 た：柄つきたわし
注：意味づけNo.1「私は〇〇と感じた」という言葉は省略

身体促進, モデリングに応じて, OT と同じものを (表 3, ⑭⑮⑯)。
折ることができた。さらに OT を見ては「これでいいの?」と確認するかのように折り紙を自ら行った

V. 考 察

1. 作業療法の成果：行為の改善と関係性の育成

1) 事例A

i. 「噛む」感覚欲求の充足とオーシャンスイングでの立位遊びの共有

Aの「噛む」という感覚欲求を見守り、要求に応じることで、OTへの関心が深まりオーシャンスイングにて立位でバランスをとる遊び（姿勢調整、運動企画）に応じるという関係性へと発展した。同時にバランスをとっている時には「噛む」行為が見られなくなった。これは、4～6か月以降の定型発達児の腹臥位や仰臥位で重力に抗した活発な遊びを行う時期から、口での探索活動が消失するなどの現象と似ている^{31, 32)}。つまり、Aがオーシャンスイング上で抗重力姿勢（立位）を保つことで、姿勢調整や運動企画が促されたため「噛む」行為が減少したと考える（図2）。

ii. 2者関係の深まりと目と手の協調性（シール貼り遊び）

図2の身体と活動を介したコミュニケーションにおいて、お互いが相手の巻き込みに応じながら相手の巻き込みの意図を理解していくプロセスが生成された。乳児期前半の前面受容期から養育者の意図に誘うことが多くなる乳幼児後半²⁴⁾には、養育者の動きや運動から意図がわかるようになる。ちょうどその頃に手先での細かな遊びにも関心を示すと同時に養育者からの「こうするよ」という行為に集中して応じることがで

きる。このような乳児期後半に代表される関係^{24, 29)}へ発展させたからこそ、Aの認知—適応の発達レベル（1歳7か月）より高いレベルのシール貼りへ誘うことができたと考える。

2) 事例B

i. 前庭—固有感覚遊びの共有から姿勢の調整、運動企画の促進

トランポリン上で足底に強い触刺激を与える遊びを通じて、姿勢をコントロールすることができた。これは、末梢への強い触刺激と前庭の感覚欲求を満たすだけでなく、OTの働きかけに応じて止まる、押すなどの不安定な支持面上で姿勢をコントロールすることを意味する。これらの活動は、姿勢—運動が3歳半以上のBにとっては、容易い運動経験であった。しかし、容易いからこそ、BとOTがお互いの巻き込みに身体と活動を通じて十分に応じ合うことができたと考える。

ii. 2者関係の発展、新しい活動（折り紙）の経験

Bは好きな活動を中心にしてOTを巻き込み、OTがそれに応じる（子分的立場をとる）ことで安心をした。しかし、OTが応じない場合は苛立ちや不安を抱く様子が顕著であった。これは、児特有のアンビバレンツな行為⁵⁾と考える。つまり、関わってみたいが相手の対応が予測できず不安であることの象徴でもあった。そのため、Bの好きな活動をできるだけ共有することで、苛立ちから「要求」の行為へと発展させた。

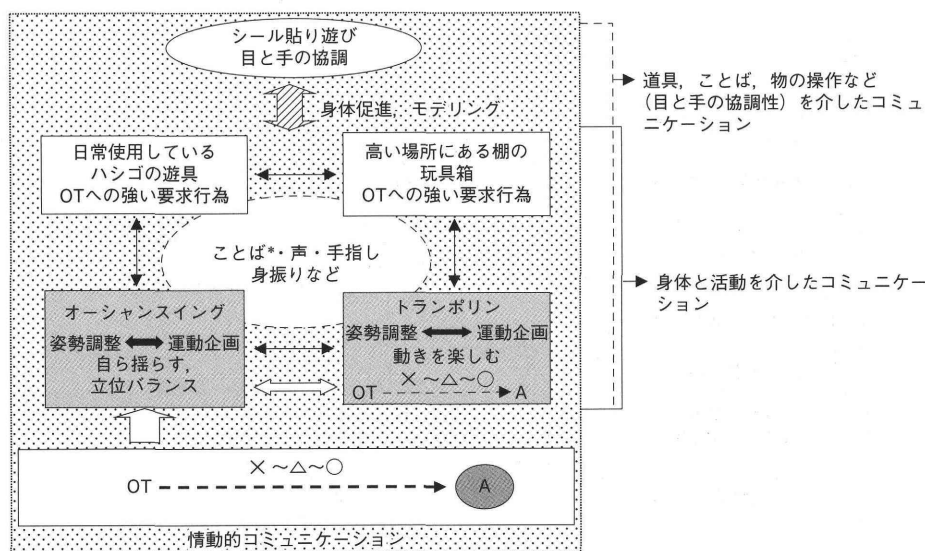


図2 事例Aの意味づけNo.2（解釈）から導かれたOTのプロセス

⇄ OTの巻き込み, 巻き込みに伴う先取り成り込み -----▶ OTの手による他動的な触圧感覚遊び

X~△~○ 拒否~受け入れ~楽しむ ⇄ 姿勢の調整や運動企画を促す → 活動過程

● ナイロントワシ, ボールの入った網など「噛む」感覚欲求が非常に強い

*あー, あーん, あーい (ハーイ), いやーん (イヤ), チャーだい (チョーダイ)

発の覚醒からのお互いの情動性や運動性が体験され、相手の意図を感じることができからである。そのため、さらに次へのステップを目指して活動の展開が可能となる。

情動のコミュニケーションを基盤にした働きかけは、感覚調整や姿勢調整、運動企画を通じて行為の改善を目指す作業療法の成果を導き、行為の間主観的な意味づけを行うためにも有効である。

VI. ま と め

先行研究で生成された作業療法プロセスで、行為の改善と2者関係性の育成を目指した自閉症スペクトラム児の作業療法を実施した。象徴的コミュニケーションの扉を叩き始めた2事例において成果が導かれ、効果的作業療法プロセスが生成された。しかし、効果的作業療法プロセスは同一のOTが実施者となり導かれたものである。今後は、他のOTが効果的作業療法プロセスで作業療法を実施、分析するなかで作業療法の成果を示していくことが臨床的研究課題である。

謝 辞

本事例研究にご協力をいただきました、患児、家族の皆様、板垣正樹 OTR に深謝致します。

文 献

- 1) 日本作業療法士協会編. 作業療法白書2005. 作業療法 2006 ; 25 : 33-34, 45.
- 2) 日本自閉症スペクトラム学会編. 自閉症スペクトラム児・者の理解と支援. 東京: 教育出版, 2007 : 4-5.
- 3) 杉山登志郎, 石井哲夫, 高山恵子, 他. 発達障害者支援法ガイドブック. 発達障害者支援法ガイドブック編集委員会編. 東京: 河出書房新社, 2005 : 32-40.
- 4) 小林隆児. 自閉症とことばの成り立ち. 京都: ミネルヴァ書房, 2004 : 26-28.
- 5) 小林隆児, 鯨岡 峻. 自閉症の関係発達臨. 京都: ミネルヴァ書房, 2005 : 50-70.
- 6) Ayres AJ. Developmental dyspraxia ; is it a unitary function?. Occup Ther J Res 1987 ; 93-110.
- 7) 村上靖彦. 自閉症の現象学. 東京: 勁草社, 2008 : 181-185.
- 8) 辛島千恵子. 共生の源, 子どもの心に重なる意味と作業療法の可能性. 作業療法ジャーナル 2010 ; 44 : 180-185.
- 9) 第十麻紀, 加藤寿宏. 学童期を作業療法士が学校で支える. 作業療法ジャーナル 2009 ; 43 : 116-122.
- 10) 辛島千恵子. 情動のコミュニケーションを基盤にした働きかけと現象学的分析. 小児保健研究 2009 ; 68 (6) : 681-691.
- 11) 村田久行. 対人関係における他者の理解, 現象学的アプローチ. 東海大学健康科学部紀要 2000 ; 6 : 109-114.
- 12) 小沢一仁. 現象学的アプローチを用いた青年の自己理解のための対話的研究の模索. 帝京学園短期大学紀要 1996 ; 18 : 11-21.
- 13) 荒木孝治. 研究的実践を導く現象学的方法について. 教育科学セミナー 2006 ; 37 : 53-60.
- 14) 広瀬寛子. 現象学的アプローチを用いた研究プロセスと今後の課題. 看護教育研究 1993 ; 8 : 31-36.
- 15) Beck C. Phenomenology, its use in nursing research. International Journal of Nursing studies 1994 ; 31 : 449-510.
- 16) 広瀬寛子. 看護研究における現象学的アプローチの適用に関する考察, 看護面接過程の現象学的分析方法作成までのプロセスに焦点を当てて. 日本看護科学学会誌 1992 ; 12 : 45-57.
- 17) 辛島千恵子, 鷲田孝保, 岩永竜一郎, 他. 広汎性発達障害の作業療法. 辛島千恵子 監修. 東京: 三輪書店, 2010 : 990-123.
- 18) Anita C, Bundy J, Shelly J, et al. 感覚統合とその実践. 土田玲子, 小西紀一 監訳. 東京: 協同医書出版社, 2006 : 11-12.
- 19) Watling RL, Dietz J. Immediate effect of Ayre's sensory integration-based occupational therapy intervention on children with autism spectrum disorders. Am J Occp Ther 2007 ; 61 : 574-583.
- 20) Baranek GT. Efficacy of sensory and motor interventions for children with 7autism. J Autism Dev Disord 2002 ; 30 : 415-421.
- 21) Ayres AJ, 宮前珠子, 鎌倉矩子. 感覚統合と学習障害. 東京: 協同医書出版, 1978 : 68-123.
- 22) 岩永竜一郎, 大迫真貴子, 長谷龍太郎, 他. 前庭及び体性感覚刺激が自閉症のアイコンタクトに及ぼす影響. 作業療法 2002 ; 21 : 23-28.
- 23) 岩永竜一郎, 斉藤斉子, 清水信之. 小集団作業療法が高機能広汎性発達障害の心の理論に及ぼす効

- 果一パイロットスタディー. 作業療法 2005 ; 24 : 474-483.
- 24) 鯨岡 峻. 原初的コミュニケーションの諸相. 京都 : ミネルヴァ書房, 2003 : 103-119.
- 25) A バンデュラ. モデリングの心理学, 観察学習の理論と方法. 東京 : 金子書房, 1975 : 25-58.
- 26) 園田順一, 高山 巖. 子どもの臨床行動療法. 東京 : 川島書店, 1978 : 32-34.
- 27) 辛島千恵子, 加藤哲也, 安本大樹. 行動分析に基づいた摂食指導. OT ジャーナル 1995 ; 29 : 437-442.
- 28) 植田嘉好子, 山本玲菜. 質的研究のための現象学入門. 佐久川肇 編著. 東京 : 医学書院, 2009 : 37-86.
- 29) 鯨岡 峻. 関係発達論の構築. 京都 : ミネルヴァ書房, 2005 : 128-210.
- 30) 鯨岡 峻. エピソード記述入門. 東京 : ミネルヴァ書房, 2005 : 63-166.
- 31) Rona A, Regi B, Barbara C. 機能的姿勢運動スキルの発達. 高橋智宏 監訳. 東京 : 協同医書出版, 1998 : 47-147.
- 32) 辛島千恵子. 発達障害をもつ子どもと成人, 家族のためのADL. 東京 : 三輪書店, 2008 : 1-21.
- 33) 山口一郎. 現象学ことはじめ—日常に目覚めること. 東京 : 日本評論社, 2002 : 31-90.
- 34) 小林隆二. 自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理. 精神科治療学 1993 ; 8 : 305-313.
- 35) 川崎葉子, 三島卓穂, 田村みずほ, 他. 広汎発達障害における感覚知覚異常. 発達障害研究 2003 ; 25 : 31-38.

- 36) 西村ユミ. 語りかける身体. 東京 : ゆみる出版, 2001 : 150-208.

[Summary]

The purpose of this study is to verify the effectiveness of occupational therapy from the view point of improvement in behaviors and growth of peer relationships, and to develop the effective occupational therapy process for children with autistic spectrum disorder.

The subjects : A four year-old female, an eight year-old male.

The method : Occupational therapy was conducted through three processes ; 1. empathetic relationship based upon affective communication. 2. communication through activities. 3. communication through tools and language.

The analysis : This author made meanings intersubjectively based upon the phenomenological analysis.

The result : Both of the children were able to achieve the occupational therapy goal which was to be able to do activities that they hadn't even tried before such as, to put stickers on and to do origami papers. Also, the effective occupational therapy process was produced.

[Key words]

autistic spectrum disorder, occupational therapy, affective communication, phenomenological analysis, qualitative research